

ABC認知症スケールにおける従来スコアとの相関性と多職種による活用と利便性
Utility of ABC Dementia Scale for Determining Alzheimer Disease Severity on
interprofessional work

神澤 孝夫¹⁾²⁾ 野口 亜美梨¹⁾ 空井 沙綾¹⁾ 森田 詠子¹⁾ 清水 みどり¹⁾
美原 盤¹⁾³⁾

- 1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 群馬県認知症疾患医療センター
- 2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳卒中部門
- 3) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経内科

[背景/目的]ABC認知症スケールは、認知症の評価スケールとして、専門医のみならず、非専門医及び医師以外の医療従事者でも短時間で簡便に評価できる本邦で開発された新たなスケールである。ドメインA:日常生活動作、B:行動心理症状関連、C:認知機能関連の3部構成である。

[対象/方法]当院認知症疾患医療センターを2017年4月から2019年3月まで受診した917例(平均年齢76.9歳±8.9)のうち、正常、MCI、AD(アルツハイマー型認知症)と診療経過・画像(MRI/SPECT:3D-SSPによる後部帯状回&楔前部血流低下)より診断され、介護者により評価可能であった299例を対象とし、専門医、医師、看護師、臨床心理士、社会福祉士、精神保健福祉など各種問わずランダムにABC認知症スケールを測定した。

[結果]各群の背景は、正常(84人、男性45.2%、77.4±10.4歳、MMSE:25.3±3.3、VSRAD:1.2±0.7、3D-SSP:なし)、MCI(82人、80.0±5.6歳、男性43.5%、MMSE:22.2±5.0、1.75±0.85、3D-SSP:軽度)、AD(133人、80.6±10.4歳、MMSE:19.8±5.0、2.5±1.1、3D-SSP:中等度から高度)で、各群のABC認知症スケール平均は、正常:109±12.3、MCI:100.7±13.8、AD:92.0±16.5であり、正常群とMCI間の有意差は認めなかったが、正常/AD、MCI/AD群間差は有意(p=0.006, 0.037)優位であった。全症例でMMSEとABC認知症スケールの相関比を求めると、0.43と生の相関を示し、認知機能関連であるドメインCとさらに強い相関(0.86)を示した。そのほか標準的スケール(DAD, NPI-D, CDR, FAST)との相関性を示した。また、うつ傾向(GDS)の高いMCIでは、ABC認知症スケールの低下がみられた。【結語】ABC認知症スケールの多職種使用下での有効性が示唆された。同時にADの初期症状に配慮する必要がある。